

③家族及びヘルパーがケアチームを担って支援していること。NPOを立ち上げ介護サービスの管理者として役割を果たすことなど積極的な姿勢に理解と共感を得た。チームのメンバーはS氏が望む介護を実践するためにチームの介護技術を高めるために努力を続けていることを理解した。コミュニケーション技術や吸引技術やその他の介護技術を高めることが介護者にとって重要事項であることを理解できた。

④S氏の提唱する「幸せ度」という評価基準をもとに自己実現のレベルを評価している。S氏の自己実現の課題は、全国の難病患者との情報交流をおこない患者の福祉サービスの拡充を目指して社会に発信していくことである。難病による不自由を抱えながらも、高い目標をもち積極的に活動している。現在の幸せ度は気管切開をした時を「0」と比較して「140」であるとは現時点の充実度は高いということである。

⑤学生のイメージの変化に関して、授業開始時はマイナスのイメージを持っていた学生がプラスの印象を持つにいたる変化が見られた。当事者の発言がプラス思考であることが学生たちの印象を変化させたものとする。当事者及び支援者の発言から強いインパクトを与えられた効果である。当事者参加型の授業の効果は学生に与える効果は大きいといえる。

将来にわたりこの日の経験が生かされ、社会人になっても当事者主体の考え方を保持していけることを期待してやまない。

#### 引用文献

- <sup>1)</sup>：佐々木公一，やさしさの連鎖，ひとなる書房 2006.113-114，<sup>6)</sup> 175-176 p  
<sup>2)</sup>：植木淳 障害のある人の権利と法，日本評論社，2011，174 p  
<sup>3)</sup>：中西正司・上野千鶴子著，当事者主権，岩波新書 860 2003 3 p <sup>4)</sup> 15 p <sup>5)</sup> 191-194 p

## 「森のようちえん」実践報告 —— 子育てネットワークの地域研究班 ——

金子 尚弘(1)・多喜乃 亮介(1)・佐久間 路子(1)・中野 圭子(2)  
 中能 孝則(3)・加藤 清美(3)・阿部 和広(3)・内畠 まどか(3)・伊藤 依理子(3)

脚注：(1) 子ども学部，(2) 教育・福祉研究センター嘱託研究員，(3) 日野社会教育センター

### はじめに

「子育て支援ネットワークづくりに関する研究—行政，市民，大学との三者協働」を中心テーマとした研究の一部門，「子育て地域ネットワークに関する比較研究」班は，「日野社会教育センター」（以下センターと表記）が主催する幼児・青少年活動に参加し，実践的研究を実施している。

日野市は，小平市と人口，面積等において類似点が多く，子育て支援行政及び民間の支援活動においても，少子高齢化が進むなど類似の課題を抱えている。両市とも，後期子育て支援活動計画(平成 22 年から 26 年) に子育て支援，児童の健全

育成を目的とした環境作りを盛り込んでいる。特に日野市の活動計画は「ひのっすくすくプラン」と名付けられ，地域ネットワークを重視した子育て環境作り推進することとしている。

日野市の推進する「ひのっすくすくプラン」の策定では，地域の「人と人とのむすびつき」，「むすびつきのきっかけとなる人づくり」，「むすびつきを支える地域のしかけづくり」がキーワードである。これは正に本研究グループが研究拠点とする「日野社会教育センター（以後センターと表記）」が 40 年以上にわたって行ってきた子育て支援，青少年育成活動，生涯学習活動に他なら

ない。

本研究は、センターの子育て支援活動のひとつである「森のようちえん」に、研究者が積極的に関わり、その流れを実践を通じて把握し、関与する人々をつなぐ「仕組み」を探求するものである。今日、日本全国に広がりをもつ「森のようちえん」は、1950年頃、北欧のデンマークで保育園に入れない子どもを持つお母さん達が身近な自然を舞台に、園舎を持たない『森のようちえん』を自主保育という形で始まったと言われている。60年以上の歴史を持つこの「森のようちえん」が活発になっていることの理由のひとつは、子ども達の持つ「感じる心」「行動する力」「判断する力」を最大限引き出して、自然との出会いやふれあいから、創造力、知恵を生み出し、行動するためのエネルギーが産まれると確信を得ているからに他ならない。日本でも幼児教育・青少年教育の見直しが進められる中、「森のようちえん」活動は300団体近くが参加しているといわれる。

現在、日本における活動は「森のようちえん全国フォーラム」のネットワークによって、活発な情報交換や指導者育成が行われている。運営委員長を務める内田宏一氏は、約30年前、日野市高幡の幼児活動に参加していた経験を基に、長野県飯縄高原に移住し、幼児教育、野外活動を始めたという経緯があり、センターとの交流が現在も続けられている。

### 日野社会教育センターの「森のようちえん」

センターが主催する「森のようちえん」は、長年行われてきた体操、制作、野外活動などの「幼児教室」や、子ども会、スポーツ活動などの「ひの自然学校」の流れの中から生まれたものである。内田氏をはじめ、日本の各地で「森のようちえん」あるいは「自然学校」を主催する指導者と、センター館長との長年の交流、またセンターが主催する10年以上に及ぶデンマーク、カナダへの「子育て支援文化」視察を通じて、子どもの育ちと「森のようちえん」について根本から考えたい

という思いが、センター独自の「森のようちえん」を実施する原動力となった。

センターの「森のようちえん」は2010年6月を第1回に、2011年3月までに18回実施された。参加者が無く、中止された月もあったが、表1のように少人数での活動を継続してきた結果は、現在の参加者が10数名となったことに表れている。参加者は4、5歳児を「森のようちえんココロ」、小学1、2年生を「森の冒険学校ほびっと」として分けているが、活動は一緒に行い全体を「森のようちえん」として実施している。活動場所は、日野市長沼公園を中心に、八王子市小宮公園、センターに隣接する日野市黒川清流公園、また夏期には山梨県清里、冬期には新潟県五日市と固定していない。

活動開始以降の開催日時場所および参加者は、表1の通りである。日帰りの活動は、10時頃現地集合、小雨決行、昼食持参、着替え持参、遊具は持参しないことという緩やかな決まりの他にはプログラムもなく、子どもたちは自由な遊びを日一杯楽しむという了解だけで集まるのである。

主な活動内容は子どもたちの興味に応じて変化するが、道中の草木や昆虫への関心から始まって、草や木、葉っぱを使った独自の創作など、それぞれが自由に遊びを見つけることを中心に、引率者が用意したハンモックやロープを使っての自主的な集団活動が中心である。どの活動でも、引率者が指示する事はなく、子どもたちが時間に縛られることなく自由に遊び、自由に集合し、自由に友達を作ることが特徴である。ただ、仲間への石投げなど危険な遊びを止めさせることはある。

以下は「活動報告」の一例である。

森のようちえん・森の冒険学校「都立長沼公園」の報告(2011年5月28日)

【場 所】 都立長沼公園(八王子市)

【日 程】 2011年5月28日(土) 10:00～15:00

【参加者】 子ども4名。①Yさん(6歳)

②R君(5歳) ③Hさん(4歳)

④K君(5歳)

表1 森のようちえんコッコロ 森の冒険学校ほびっと 参加者累計

2010年度					
日 時	場 所	コッコロ	ほびっと	合 計	備 考
6月5日	小宮公園	6	5	11	
7月17日	長沼公園	3	0	3	
9月11日～12日	清里高原	2	0	2	大人3名 (大人プログラム有)
10月2日	長沼公園	2	0	2	
11月13日	長沼公園	3	2	5	
12月26日～28日	五日町	6	6	12	雪だるまキャンプ
1月15日	長沼公園	3	1	4	
2月5日	小宮公園	3	1	4	
3月5日	長沼公園	3	0	3	
2011年度					
4月23日	センター近隣	3	3	6	大人6名 (大人プログラム有)
5月28日	長沼公園	3	1	4	
6月11日	小宮公園	2	2	4	
7月9日	センター近隣	2	4	6	大人5名 (大人プログラム有)
8月6日	長沼公園	5	1	6	
9月23日～24日	清里高原	5	2	7	大人10名 (大人プログラム有)
11月5日	小宮公園	2	0	2	
12月10日	長沼公園	2	0	2	
12月27日～29日	五日町	7	7	14	雪だるまキャンプ
			延参加者	97	

リーダー2名 ヨンタ (センター館長, 子どもたちには愛称のみを紹介してある)

とんとん (加藤) 合計6名 (参加申込者5名)

【前日の確認事項】

台風の影響もあり天気予報は終日小雨との予報であったが、フィールドのことも良くわかっていることなど、安全性にも問題ないことを確認し実施することを決定。ただし、28日朝荒天になった時には再度判断することを確認する。

【装備】

\*ブランコセット 2組

\*ハンモックセット 1組

\*手洗い用の真水

\*救急セット

スケジュール

10:00 長沼公園駐車場集合。1組集合場所を間違えたために出発が少し遅れた

10:20 挨拶をして、長泉寺西尾根をすすむ。霧

降の道を下る

10:50 休憩地点遊びの広場に到着

12:15 休憩所出発

12:30 頂上到着 (トイレ, 手洗い, 昼食)

13:15 頂上で遊ぶ

14:25 頂上発。長泉尾根を下る

14:40 駐車場到着

子どもたちから、「もう一回行きたい」との声が上がり、解散までの時間があつたので、しばし竹藪コースを散策する。

15:00 長沼公園駐車場に到着・解散

活動報告

1. 雨も楽しむ

朝からしとしと雨が降っていたが、集合時間のころには上がり、挨拶をして出発。「雨の日も自然の中で楽しもう」と出発する。

雨に濡れた草の上を歩き始めて数分、大きく成長したタケノコを発見、「タケノコだ」とそばに

近より、触って見たり、ゆすって見たり、そして見上げては「あ、毛がある」「柔らかい」「皮がむけそう」

柔らかいタケノコが折れないかひやひやしながら見守る。

## 2. やぶこきに挑戦

タケノコとの出会いを楽しんだ後は、先へ進もうと再び雨の中を歩きはじめた。そしてヨントはここでやぶこきを思いつき、さっそく実行する。全員雨に濡れたやぶの中へ。最初は楽しそうであったが、『いやいやこれは手ごわいぞ』と身をもって体験する。

しかし、前に向かって進むしかないのである。最初の笑顔はどこへやら、必死になって目の前の坂に挑む。大人にとってはどうってことのない坂であるが、子どもたちは必至である。自分の体を坂と平行に保ちながら、周りにある草をにぎりしめて上を目指す。足も手も目も耳も顔も、全ての感覚を集中させているような感じである。

そこへ、一足先に上にいた大きないたずら坊主が木をゆする。すると木の葉についていた雨だれが一斉に落下し、子どもたちに降りかかる。

「ヒエー冷たい」というより気持ちよさそうであった。

## 3. 雨の中をさらに歩く

森の中にいると、雨がどれくらい降っているのか、風がどれくらい吹いているのかよくわからない時がある。しかし子どもたちの活動には全く関係なく、あちらが気になり、こちらが気になりながら、歩き続け中間地点に到着。

一息入れたら次の休憩地点に向かって先に行くもの、あとから追いかけるもの、と再び歩き出す。そして、さっきのやぶこきの時に木を揺らされて雨をかぶったK君（5歳）は、何とかお返しをしたいらしく、手ごろな木を見つけては必死に揺らしていました。しかし思うように木は揺れない。そして、木の大きさによってはそう簡単に雨が落ちないことにも気が付く。しかし悔しきは収まらない様子。

ヨントはそれをしり目にあちらこちらの木々を揺らして得意げになっている。そのたびに大小の雨のシャワーが降り注ぐ。小さなK君は大きなかめ面をしてとにかく悔しそうである。しかし途中であきらめたのか、何かを悟ったのか冷静そうに見えてきた。（この時点でどちらが大人なのか判らなくなってきた）

## 4. 第一休憩所到着

いつもの休憩場所に到着する、早速リュックを下し雨除けのシートをかけて遊びに入る。そして、ヨントはブランコのロープを掛ける作業に入る。ここでハブニング、木の枝に投げたロープが2回転してしまった。このままではブランコが作れない、ヨントは必死になって緩めてみたり、ゆすってみたり。しかし何ともならない。

ヨント再び考える。「そうだ尻尾の方のロープを逆に投げれば何とかなるかもしれない」早速挑戦。1回、2回。ロープは思うように飛んでくれた。しかし今少し手が届かない。横で、Yさんを肩車してみると「届いた」。

よかったよかった、すぐにブランコを作り、みんなで楽しむことにした。R君、Hさん、Yさんはすぐそばに来て順番待ちをしながら、前のお友達が上手に乗れるようにお手伝いする。そして、スリル満点のブランコ遊びの始まりです。

## 5. あれK君がいない

ブランコを掛ける時にそばにいたはずのK君がいない、振り返ると遠くの方でとんとんとロープで遊んでいる、「K君、ブランコに乗らない」と誘うが「のらない」とそっけない返事。

## 6. サー頂上についた

休憩所での遊びを終わり、頂上へ向かう。予定より30分くらい遅れて頂上に到着。トイレと手洗いを済ませて、お母さん手作りの弁当を楽しむ。そこで、Yさんは「ママが作ってくれた卵焼きは最高に美味しんだ」と言いながら見せてくれた。「どういうふうな美味しいの?」「外はふんわり中はとろりとろけるような感じなの」「そうかヨントも食べてみたいいな」、すると隣で「Hのと

ころは今日はパンです」と大きな口を開けてパクリ。続いてK君とR君も見せてくれました。参加者全員お母さんの愛情いっぱいの弁当をいただく。

### 7. 雨がやまない。どうしようかな

森の中にいる時にはさほど感じなかった雨足であったが、空が開けている頂上では結構降っている感じがした。とんとん（引率者）とヨントは食事をしながらも、上を見上げてこれからどうしよう。とんとんからは「近くに私設の美術館があるので、雨宿りもかねてそちらに行きましようか」と提案。ヨントもすぐに「どうしようか」と意見は一致し、安心して食事を楽しむ。

しかしそのことを子どもたちに提案する暇もなく、子どもたちからは「ブランコ作らないの」「ハンモックは作らないの」と、『雨が降っていたらそれを楽しめばいいではないか』といわんばかりに、雨も含めてすべての自然を自分たちの仲間と思っているようだ。

### 8. K君何か発見！

ヨント虫眼鏡を取り出してあっちへ向けたりこっちへ向けたり、するとK君が走りより「何が見えるの」「自分でのぞいてみたら」と虫眼鏡を渡す。K君、早速松の木の地肌に近づけていく、「いた、赤いクモがいる」するとHさんが近づいてきて「どこ、どこにいるの」「ほらここだよ」「どこ」ヨントも眼鏡を借りてのぞいてみる。そしてHさんと同じように「どこ」。見つからない、そしてしばらく探すと点のような赤いものが見えてきた「これかな」すると小竹君が「動くでしょう」よく見ると本当に動いていた。肉眼ではほとんど見えないものをよく見つけたなと感心しきり。

### 9. K君やっぱりロープ遊びに夢中

K君は頂上でもブランコやハンモックには全く興味がない様子。一人でロープをいじっていたかと思うと、いきなりとんとんの足元をロープでぐるぐる巻き始めてきた。ぐるぐる巻きにされて動けなくて困っている様子がおかしいらしく、ニコニコ笑いながら喜んでいる。とはいっても子ども

の巻いたロープなどは簡単に脱出できるが、そこはとんとんは大人なのでK君の様子を見ながら駆け引きしながら頃合いを見計らって脱出する。するとまた悔しそうに更にぐるぐる巻きにしてくる。そんな繰り返しをしばらくしていたら、回りの子供たちも近寄ってきてとんとんの捕獲を手伝い始める。最後には「逮捕する」と木に縛り付けられてしまったが、「助けて〜」と困った振りをしていたらHちゃんがロープを解くのを手伝ってくれたりと救われる場面もありました。

最後にK君がロープを片付けていましたが、なかなか思うようにいかないので「手伝ってあげようか？」とヨントが声をかけても、「一人でやる」と最後まで頑張っていて奮闘していました。

### 10. ヨント、風と遊ぶ

ヨントは上着を脱ぎ、小枝をハンガーにして、ひもを通し、木の枝に吊るした。

子どもたちはその不思議な光景に「あれは何？」と聞くので「あれはヨントだよ」と言うと、今度は上着を脱いだヨントを指して「じゃああれは誰？」と聞くので、「あれはゴントかな」・・・。

子どもたちの頭の中を覗いてみたくなるような軽妙な会話をしばし楽しんだひとときだった。お弁当のあとはブランコやロープ遊びとパワフルに遊んでいたが、女の子2人がヨントの上着をつないでいるロープを引っ張り始めた。上着は上へ下へ。そして左に右に行ったり来たりゆらゆら揺れる。その光景はまるで踊っているようで2人は嬉しそうに何度も引っ張っていた。とんとんがその動きにノリノリのリズムを口ずさんであげると大笑い。その屈託のない笑い方は最高の笑顔であった。そのおかげでとんとんは何回も歌う羽目になってしまった。しかし、そのうち余りにも激しい動きに上着は木のハンガーからずりおちそうになり、くたびれたヨントになってしまった。子どもたちの、“なんでも遊びに変えてしまう想像力”にはとてもかなうものでないとわかってはいたが、改めて「子どもの素直な心に」すごいなと気づかされた。

## 雪だるまキャンプ報告 (2011年12月27日から29日)

森のようちえん「雪だるまキャンプ」は、新潟県五日市町スキー場周辺の雪の積もった田んぼでの活動が主である。日中は坂道を滑ったり、雪だるま作り、雪中ゲームを除いてほとんどの時間を個々に遊びを見付けて、雪の中を走り回るだけのプログラムで遊び、夜は宿の広間で、スタッフの劇や、ゲームを楽しんだ。

## フォーラムと学習会

子どもを伴った実際の「森のようちえん」活動の前後には、年2回を目標に「森のようちえんフォーラム」と、活動目的の検討や活動内容の報告を兼ねて、センター関係者による学習会を実施した。学習会では、「森のようちえん」の報告から、子どもたちの変化、子どもと自然物との交流、そして参加した子どもに何が起こっているのかを話し合いながら、森のようちえんの意味を話し合った。実際には、進展のない内容ではあったが、子どもの表情の変化、問題児と言われる子どもの、問題のない様子などから、少しずつ森のようちえんの「やり方」、「子どもの遊び」への支援の仕方が見えてきたかもしれない。プログラムも号令もない群れの中でも、子どもたちが自然に集まり、相手を尊重し、助け合い、身体に従ったスケジュールで戻ってくるからである。

2011年度(前年度を含む)の学習会とフォーラムは次の日程で実施した。

2010年

12月23日(木)フォーラム

2011年

2月16日(水)、3月16日(水)、4月27日(水)、  
5月18日(水)

5月22日(日)フォーラム

6月15日(水)、7月13日(水)、8月10日(水)、  
9月15日(木)、10月5日(水)、11月18日(金)

11月23日(水、祝日)フォーラム

「自然から学ぶ人間の生き方」－今なぜ森の

ようちえんが必要か－

12月7日(水)、1月18日(水)、3月7日(水)

森のようちえんフォーラム2011年秋の報告

フォーラムは年2回の開催が定着してきた。

次は、2011年2回目の報告である。

テーマ：「自然から学ぶ人間の生き方」－今なぜ森のようちえんが必要か－

日時：2011年11月23日(祝・水)13時から  
16時30分

会場：ひの社会教育センター・東小ホール

## 第1部

「自然から学ぶ人間の生き方」－今なぜ森のようちえんが必要か－

講演者：岸井成格氏(NPO法人森人プロジェクト委員会理事長・毎日新聞主筆)

岸井氏は新聞記者になったばかりのころ、水俣病などの「公害」について取材したことがきっかけで自然の大切さに目覚め。40年前、これらの行政をつかさどる省庁ができることになった際、「環境」という言葉を推して、現在の環境省(当時は環境庁)が出来たという。いわば名付け親の一人になったと自負している。

講演内容：日本の森は今3つの危機を迎えている。1つ目は針葉樹林の枯死、2つ目は広葉樹林の枯死そして3つ目が外国資本による、水源地森林の買い占めである。針葉樹・広葉樹の枯死では、日本は国土の7割が森林という森林王国であるが、事態は深刻になっている。林業が衰退し、人手不足による森林の放置や、大陸からの黄砂や酸性雨などによる土壌汚染の影響がある。また、外国資本による森林の買収がある。日本人は山や森などを売買の対象、利殖の対象と考えていないが、2050年問題と言われる人口100億人に達するとき、水、エネルギーなど資源の調達が不可欠となるのに対してまったく無警戒、一方外国は必死で資源囲い込み

を図っており、日本の水も外国に奪われてしまう。

森がなくなったら日本は無くなる。日本人は自然があるのが当たり前と、自然を忘れかけているが、今こうして目の前で日本の森が危機にさらされていることを皆の共通問題として意識することが必要である。昔に比べて自然への畏敬や感謝を忘れていたのではない。自然（＝環境の問題点）を見つめると、“今”人間に必要なものがわかる。人間に必要なものは何なのか、人間の豊かさとは何か？ということを確認する必要がある。そして、こうした環境対策においても「人育て」が大切なのである。

## 第2部「森づくり・森あそびの大切さ」

シンポジウム：岸井成格氏、金子尚弘

ファシリテーター：加藤清美

子どもにとっての豊かさは、好奇心や想像力を素直に伸ばすこと、自然の摂理や不思議さを身をもって学ぶこと、感性や感覚を伸ばすことにあり、それらは必ず後々の感覚に結びつく。会場からも実際に森のようちえんを日野市で行っている参加者から活動の様子が報告されたり、日野市里山保全運動の活動内容が紹介されたり、センターの森のようちえんの学習会に参加している元小学校教諭からも、森のようちえんに携わるようになったきっかけである、教諭時代からの想いや、この5年間で不登校や発達障害の子ども達が5倍に増えたのはなぜか？子どもを自然の状態に戻してあげたいという気持ちから森のようちえんに期待をしているという話がでた。来年度から小学校教諭になるという参加者も「もし保護者の方から森へ出かけることへ抵抗された場合どう対応したら良いか？」という質問が出され、保護者が心配しているのはケガや不潔などの精神的な不安であり、それは根気強くコミュニケーションを継続していくしかないであろうというアドバイスが出

された。

フォーラムでは、結論が出されることはなかったが、参加者は簡単に結論を出ないことを十分承知しており、今後の継続的な討論、またいろいろな場所で活動を進める人達の連携を保つ事を確認して、フォーラムを終了した。

フォーラム終了後回収されたアンケートには次のような意見が寄せられた。回答 27 名

### 1 本日のフォーラムを何で知りましたか？

ひの社会教育センターのホームページ…1名

森のようちえんのホームページ……………3名

友人の紹介……………8名

館内チラシ……………1名

新聞……………2名

DM……………1名

その他……………7名（紹介・職場の交換便・ゼミの

先生紹介・ミクシー）

### 2 職業

幼稚園教諭・保育士……………7名

森のようちえん主催者…1名

センター事業参加者……………1名

子育て中の親……………1名

学生……………4名

研究者……………2名

その他……………9名（栄養士・保育施設運営・会社員・

リサーチャー・子育て支援グループ）

### 3 フォーラムへ参加した理由をお聞かせください。

- ・森で子ども達が遊ぶことに興味があるので
- ・デンマークの幼稚園を訪問し、森が身近になりより知りたいと思ったから
- ・子どもを「森のようちえん」へ参加させていて、子どもは森で学習しているので親も学習したくなりました。
- ・あって当然のものが奪われている社会の中で再生していかななくてはならないものは何か、大人の責任として取り戻すために学ばせていただきたい
- ・岸井さんの話が聞きたかった
- ・森のようちえんに興味があったため

- ・森のようちえんの活動を企画中であるため
- ・テーマが私の考えている事と似ていて、共感したため。多くの親に伝えたい為のヒントを得たい
- ・歩いたり公園で遊ぶ保育を実施中でテーマに興味をもった為、自主研究組織「自然体験クラブ」会員で自然に興味があるため
- ・政治ジャーナリストと森のようちえんの話を開きたかった
- ・歩き保育を試みている者として興味を持った
- ・ミクシーでたまたまみつけて環境教育に興味をもっていたので
- ・自然と人との関わり的重要性、子ども達をいかに自然の中で育てるか興味があった
- ・都市、立地等のリサーチをしながら日本の都市国土景観を良くしていく事をライフワークとしている中で様々な分野の視点で物事を考え突き詰めていくと、必ず政治と教育の壁に突き当たるので
- ・森の近くに住んでいて子どもも孫も森人間です。これは素晴らしい事で「森のようちえん」をひろげてほしいと参加しました。
- ・岸井さんの話と森のようちえんの共通点は何か拝聴したいため

#### 4 本日のフォーラムの感想をお聞かせください。

##### 第1 部岸井成格氏講演「自然から学ぶ人間の生き方」～今なぜ森のようちえんが必要か～

- ・自然を守る大切さ、自分になにが出来るのか考えています
- ・今後の私の生き方に「森」がキーワードになりそうです。
- ・環境という視点から見た幼児教育というのは、とても大きな問題で難しいと感じました。より森のようちえんが好きになりました。
- ・自然も変わっていくこと何の疑いもなく暮らしていたのですが、少しでもそのような「変化」を考えていきたいとおもいました。
- ・伝えられてきたものを高度経済成長のもとで失ってきた助けをした年代の者たちにとって

大きな罰を感じます。すぐに取戻しをしなければ大変なことになる強く感じました。環境の大切さも意識的にやっていかなければ失ってしまうものがさらに大きいという原点に戻されました。

- ・大きな視点、グローバルな話で良かった
- ・世界的、歴史的な視野、最近忘れていました。良いお話で感動しました。
- ・人間の生き方を考えました。子どもにとっての豊かさは何なのかこれから考えていきたいです。
- ・大学の授業で日本人は日本独自の文化をあまり大切にしていなかったり、先の事をあまり考えていないという話を聞いたことがあります。水の話聞いて思い出しました。これから保育者になるので自然とともに生きていくということを大切にしながら保育をしたいです。自然が好きで、自然があれば自由に遊べるような子どもを育てたいです。
- ・「継続すること」という言葉を確認することが出来ました。「信念」「継続」を学びました。
- ・地球的視野で考えるべく今日のことを一つの糧にしたい。
- ・様々な視点でものを見ることを学びました。子どもたち、親たちに何が伝えられるか考えていきたいです。
- ・自然との共生の必要性を広めていくことの重要性を痛感しました。
- ・小さいころの自然の中で経験したことは一生の宝になると思います。世界状況や国の状況を聞いて勉強になりました。
- ・様々な視点から自分の置かれている時代を考えることができた。「自然」を知ることは多角的な見方が必要だとおもいました。
- ・国内には問題が山積みですが、子どもの教育が基本であり、必要だと思うのでこのような活動は貴重になると思います。
- ・今は秘書の仕事をしていますが、これから森のようちえん、または自然に関わる仕事をし

たいです。今回のお話は勇気をいただきました。岸井さんの活動の裏には様々な体験、経験が伴っているので説得力がありました。

## 第2部「森づくり、森あそびの大切さ」パネルディスカッション

- ・もっと定例の話があると良かった
- ・自然がテーマであること、今やれること、身近なところから考えていきたいと思います。
- ・様々なフィールドで活躍するみなさんの活動をきくことが出来てよかったです。
- ・「森のようちえん」が思っていた以上に様々な所で実施されていたことにおどろきました。加藤先生が話されたように横のネットワークを広げていかれる事を期待します。
- ・「森のようちえん」「野外」という言葉に不自然を感じるのは自然といわれる山の中で育ててきたからだと思いますが、現実にはどの言葉を使わなければならぬ環境になっていることが本当に残念です。ごく自然にあるものをなくしてしまった大人たちが今、子どもたちに残すものは岸井さんのお話で考えなくてはいけないと思いました。
- ・森のようちえんということを考えるきっかけになりました。思想、考えを保育に生かしたいです。また、森を守っていくことを次の世代に伝えていくことも大切な役割だと思います。
- ・子ども自ら自然の中へ入っていけるのが普通の様子だというような保育を目標にしたいです。
- ・もう少し森の幼稚園をフォーカスしてほしい。日野の森のようちえんの映像などをみながら具体的な話を聞きたかった。
- ・一部に加えてさらに話が広がったのでとても有意義でした。
- ・自然の中で共に生きることの大切さを感じることができました。
- ・自然を愛する、人を愛する、森を愛する心の

つながりを感じました。

- ・イベントブームで終わらせない為には日常生活環境の中で自然を実感できることも大切だと思います。この30年で日野の自然も大きく失われ、日常生活の中で自然体験ができないあるいはおの大切さを忘れた同世代(30～40代)の親ばかりです。ここに参加した様な人々は「知っている」ひとであり、重要なのは「知らない」「忘れてしまった」大人に伝えることだと思います。
- ・学生さんの子ども時代の森というものへの関わり、そして今それがどのように影響を与えているのか話をしてほしい。

## 5 フォーラムやセミナーとして、森のようちえん以外に参加してみたい講座はありますか？

アウトドア・テクニク講習(テントの建て方や火のおこし方、ロープワークなどの技術講習) ……8名

子どもの発達講習(子どもの身体、子どもの健康・運動、発達障害など) ……6名

レクリエーション講習(アイスブレイクや集団・少人数レク、野外・室内レクなど) ……7名

キャンプファイヤー講習(井桁の組み方、流れの組み方、安全管理など) ……3名

リスクマネジメント講習(山、川など野外での安全管理など) ……9名

その他 ……2名(これから森のようちえんで働きたい人向けガイダンス、多摩丘陵のまちづくり自然環境に関わる活動)

## 6 その他お気づきの点や、メッセージなどあればご記入ください。

- ・身体感覚、自然感覚を失っている人が多いことに危機を感じている。幼い頃から人口的な音や映像で目や耳をふさがれ、記号情報の海にどっぷり浸ってしまっている子ども、あるいはその親にいかにか大切な事を伝えていくか、21世紀のパラダイムシフトの機にあって、マスコミの力でもなんでも草の根活動も含めて総力あげて伝えひろめなければならない

い。

- ・岸井さんの話にもありましたがどうぞ継続して発信して行って下さい。身をもって体験することが最大の知恵となって積み重なっていくと思います。
- ・森のようちえんの認知が少ないので、具体的なテーマの話をしている方の話を聞きたかったです。
- ・森のようちえん的な実践について、もっと発信をしていただきたいと思います。
- ・私の園は森の中にあります。幼稚園でドングリの苗を育てること、保育の中で出来ます。役立てられるものでしょうか、単純にそう思っていました。自然環境を守ろうと思えました。周囲には昔のままの状態が残っています。遊びに来て実際に見て頂きたいです。
- ・今回、参加させていただきとても学ぶことがあり、勉強になりました。
- ・3・11後、環境はさらに大きく変化しました。自然のすばらしさはあってもそれ以上に放射能という体を蝕むむっ室が降り注ぎ、風、雨によって福島だけでなく日本中、川から海へ地球のあちらこちらを汚染してしまいました。それはいつまで続くのか予測できない現実です。ロシアの状態を見ても子ども達にとって大変なことと思います。「避けられる

ものは避ける」というのが必要なとおもいますが、子どもにとってはこれまで渡したちが経験したことのない規制のある生活をしていってもらわなくてはいけない目に見えない物質との戦いです。そのことについての学習会もあればと思います。

- ・参加したいろいろな立場の人の体験や考えなどを聞きたかった。

## 結び

センターの「森のようちえん」は、2012年度3年目を迎え、毎回の参加者が10数名となっている。親が参加するプログラムも、センターでのキャンプ料理講習会や、子どものプログラムと親プログラムが並行して行われる八ヶ岳の1泊キャンプなど充実してきた。このような活動を通じて親の理解が得られたことにより、一回限りではなく、継続的に参加する傾向が強まっていることも大に関係している。今後、センターの学習会を通じて、子どもの育ちと象徴的な意味で用いられている「森」の真の意味を、継続的に考えることを目指し、子育てネットワークの中に定着させることを目指している。

参考資料：日野市活動計画「ひのっすくすくプラン」

## 障害のある学生支援 ～他大学視察報告～

子ども学科 市川 奈緒子

### はじめに

「教育ルネサンス：発達障害と大学」…これは2011年4月、読売新聞のくらし・教育欄で連載されたコラムのテーマである。大学にも発達障害のある学生が「普通に」学んでおり、大学側もそのことを認識してさまざまな手立てをおこなうこ

とが一般的なことと認知され始めている。

全国的には、積極的な取り組みをおこなっている大学を拠点校や協力校と指定し、それらを中心として、全国を8つの地域ブロックに分け、それぞれの地域の大学等間のネットワークを構築しながら、障害がある学生の支援体制の整備・充実や、